

# マルコス大統領を生みだしたもの —フィリピンにおける権威主義的民主主義—

原 民樹

早稲田大学アジア太平洋研究センター助教

## マルコス大統領の誕生

2022年5月に行われたフィリピン大統領選において、1970～80年代に独裁体制をしいたフェルディナンド・マルコス(以下、父マルコス)の息子、フェルディナンド・ボンボン・マルコス・ジュニア(以下、マルコス)が、圧倒的な得票数で当選した。この選挙結果は世界に驚きを与えた。非暴力の民衆革命によって独裁政権を打倒し、アジアにおける民主化のパイオニアとなったフィリピン人が、なぜいま独裁者の息子を熱烈に支持するのか。昨年来、多くの人びとがこのような疑問を抱き、さまざまな説明が提示されてきた。本論は、マルコス政権発足から1年を経過した時点から、あらためてこの問いに答えようとするものである。

まず、マルコスという人物について簡単に紹介しておこう。1957年に生まれたマルコスは、父マルコスが戒厳令体制下で大統領を続けていた1980年に北イロコス州の副知事に当選し、政治

家としてのキャリアをスタートさせた。1986年に父マルコスがピープル・パワー革命によって国外追放となったとき、マルコスもともにハワイに亡命した。1991年に帰国が許されると、マルコス家は地盤である北イロコス州を足場に、すぐさま政界に復帰していく。マルコスは1992年に下院議員としてはじめて国政に進出し、2010年には上院議員に当選した。2016年には副大統領選に挑戦するも、レニ・ロブレド候補に僅差で敗北し、苦汁を嘗めた。性格は温厚で知られるが、政治家として特筆すべき実績はない。大多数のフィリピンの政治家の例にもれず、マルコスも「能力」や「成果」ではなく、「血筋」でキャリアを形成してきた人物とってよいだろう。明確なイデオロギーや政策思想はもっていないようだが、父マルコスの名誉を回復し、一族の権勢を維持することには強い意欲を示している。

このように家柄以外に政治資源をもたない政治家が、2022年の大統領選で歴史的な大勝を収めた。マルコスの得票数は約3,100万票、得票率は約59%だったが、フィリピン史上、大統領選で過半数を獲得したのは父マルコス以外におらず、民主化後でははじめてのことである。この予想を超えるレベルの勝利は、どこから生まれたのだろうか。これはマルコス家の政治力だけでは説明できない。マルコスの母イメルダ・マルコスは1992年の大統領選に出馬したが、得票率10%で5位に終わっているし、先述したようにマルコスも2016年の副大統領選で惜敗している。つまり、マルコス家は全国区で常勝

### はら たみき

一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。博士。専門は政治学。2022年より現職。共編著に『現代フィリピンの地殻変動—新自由主義の深化・政治制度の近代化・親密性の歪み』(花伝社、2023年)など。

を保証するほどの支持者をもっていないうえに、民主化闘争の成果を重視する人びとにとってはもともと嫌悪すべき一族であるため、その影響力には限界がある。さらにフィリピンには、マルコス家のようにある地域に強固な地盤を築き、何世代にもわたって地方政府と国政の要職を独占する、いわゆる「政治王朝 (Political Dynasty)」はいくつも存在し、マルコス家のライバルは多い。そうした状況のなか、2016年には得票数1,400万票弱で副大統領選に負けたマルコスが、わずか6年後に3,100万票超を獲得して大統領に当選するという驚くべき飛躍は、どうして可能になったのだろうか。

## 2022年大統領選の投票分析

この問いにアプローチするため、まず2022年にマルコスが獲得した票の内実を見ていこう。第1に、選挙直後に提示された分析のいくつかは、階級間の亀裂に注目した。すなわち、高学歴のホワイトカラーを中心とする上位中間層がリベラルな改革派であるロブレドを支持したのに対し、下位中間層や貧困層はSNSで拡散された偽情報の影響を強く受け、マルコスを支持したという見方である。しかし、投票傾向を多角的に検討したドゥライらによれば、所得階層や学歴によってマルコスへの支持傾向に有意な差はなかった(Dulay et al. 2023:93)<sup>1</sup>。したがって、階級的亀裂からマルコスの勝利を説明することは説得力を欠く。1998年に大統領選に出馬したジョセフ・エストラダは、貧困層の味方であることを強くアピールして勝利したという事例があるし、近年のフィリピンは経済成長を続けているとはいえ、依然として深刻な格差社会であるから、階級的位置が投票行動にどのように影響するかはつねに意識すべき論点だが、2010年の選挙以来、選挙における階級というファクターの重要性は失われている。

第2に、有権者の年齢構成に着目する視点がある。フィリピンの平均年齢は24歳であり、有権者の多くは父マルコス政権崩壊後に生まれた。それゆえ、父マルコスの時代は経済発展著しい黄金時代

だったという物語を信じやすく、マルコスの勝利に大きく貢献したというのである。この論点は、メディアの報道のなかでたびたび強調された。しかし、先述のドゥライらの分析によれば、年齢によってマルコス支持の傾向に大きな差異は認められなかった(Dulay et al. 2023:91)。若者がSNSの情報に感化されて上の世代よりも強くマルコスを支持したということはなかったし、父マルコス時代を実際に知っているからといって、マルコスの支持率が低いということもなかったのである。

それでは何が重要なファクターだったのか。ドゥライらによれば、マルコスの当選にもっとも大きく影響したのは、言語集団ごとの投票傾向である。フィリピンはタガログ語(フィリピン語)を公用語としているが、タガログ語以外に全国で150以上の異なる言語が話されており、それぞれの言語集団の地域的アイデンティティが強固に存在する。こうしたアイデンティティが選挙での投票先を大きく左右する。マルコスは、地元であるイロカノ語圏の有権者の92%、隣のパンガシナン語圏からも80%近い支持を得たが、対抗候補のロブレドの地元であるビコラノ語圏では9%の支持しか得られず、逆にロブレドはここで84%の支持を得ている(Dulay et al. 2023:89)。こうした視点は、フィリピンの選挙分析において古典的なものであり、フィリピン政治の旧態依然とした性格を示しているだけで新味に欠ける。しかし、この視点から2022年大統領選が新しかったのは、マルコスがドゥテルテ家と手を組むことにより、離れた地域の有権者がマルコスを支持したことである。マルコスは、副大統領選に出馬したドゥテルテ前大統領の娘であるサラ・ドゥテルテとタッグを組むことにより、ドゥテルテの出身地であるミンダナオ島を中心とするビサヤ語圏からも多くの支持を得ることができた。先述のように、マルコス家の支持基盤だけではロブレドと互角の戦いになっていたところを、ダブルスコアで勝利できたのは、ドゥテルテ人気を全面的に取り込むことができたからである<sup>2</sup>。さらに重要なのは、マルコス家の支持基盤より、ドゥテルテ家の支持基盤のほうがやや厚いことである。これは、サラ・ドゥテルテがマルコスを上回る

3,200万票超(得票率約62%)を得て副大統領に当選したことからわかる。つまり、単純化して言えば、ドゥテルテがマルコスを勝たせたのであり、有権者はドゥテルテ政治の継続を望むがゆえにマルコスに投票したのである。

## ドゥテルテ政治とは何だったのか

したがって、投票結果の分析から進んで、より深いレベルでマルコスの勝因を理解するには、ドゥテルテ政治とは何だったのかという論点を検討しなければならない。ドゥテルテ政治の特徴として、誰もがまず想起するのは「麻薬戦争」だろう。ダバオ市長時代の麻薬対策が奏功して評価を得たドゥテルテは、大統領選のキャンペーンにおいて麻薬戦争を全国化することを公約とした。ドゥテルテ政権発足直後から重点的に取り組まれた麻薬戦争の結果、政府発表によると同政権期に6252名が捜査中に殺害された。NGOや人権団体は、その3倍は犠牲者がいると推定している。法的手続きを無視した強権的な麻薬政策は、国内外から強い批判を招いた。現在、国際刑事裁判所は麻薬戦争による超法規的殺害が人道に対する罪にあたる可能性があるとして捜査を行なっている。ドゥテルテの強権的な政治スタイルは、麻薬戦争に限定されなかった。2017年に、麻薬戦争を批判したレイラ・デリマ上院議員が、司法相を務めていた前政権時代に刑務所内での麻薬取引を認める見返りとして金銭を受け取ったという容疑で逮捕、起訴され、現在も勾留されている。これは、ドゥテルテによる政敵の弾圧だとみなされている。ドゥテルテ政権に批判的な立場をとるネットメディアのラッパーの編集長であるマリア・レッサは、サイバー名誉毀損罪など複数の容疑で起訴されている。また、大統領選時にドゥテルテ陣営の広告を放送しなかった大手テレビ局ABS-CBNは、2020年に議会から放送権の更新を拒否された。さらに、政権は同年に反テロ法を制定し、治安当局が「テロリスト」とみなした人物を令状なしで逮捕できるようにした。これらの措置は、フィリピンの自由主義を毀損するものであり、ドゥテ

ルテ政権が権威主義的であることを示している。

しかし、ドゥテルテ政治にはもうひとつの側面があった。それは開発と福祉を積極的に担う社会民主主義政権という性格である。ドゥテルテは政権発足当初から「ビルド・ビルド・ビルド」をスローガンに、インフラ開発に大きな予算を投じた。同様にインフラ開発を重視した2010～2016年のアキノ政権を上回る、GDP比5～6%の規模の予算が毎年インフラ投資にあてられた。道路、港湾、橋梁などの整備が進み、「インフラの黄金時代」という言葉が聞かれるようになった。いま国民の期待を集めて工事が進んでいるマニラの地下鉄やセブのモノレールも、ドゥテルテ政権期に開始されたプロジェクトである。さらに、送金によって経済成長を支える海外出稼ぎ労働者に対する支援制度を充実させ、国民皆保険制度(Universal Health Care)を創設し、公務員の給与を引き上げ、公立大学を無償化するなど、さまざまな福祉政策が展開された。その結果、ドゥテルテ政権は社会政策に民主化後最大の予算を割り当てた政権となった(Ramos 2020: 488)。

こうした諸政策の結果、ドゥテルテは歴代最高の支持率を維持して任期を終了した。ソーシャル・ウェザー・ステーションの世論調査によれば、政権終了時点でドゥテルテ政権に「満足」と答えた有権者は88%だった(Social Weather Stations 2022)。これは驚異的な高さである。フィリピンの大統領は任期開始時点に人気があっても、任期中に有権者から政権運営に対する不満が高まり、政権終了時には大きく支持率を下げるのが常だった。そのため、選挙ごとに大きく個性の異なる大統領が選ばれるというパターンがあった。2022年、おそらくはじめてこのパターンが崩れた。今回多くの有権者は、ドゥテルテと異なるタイプの指導者を求めて、候補者をあれこれ比較検討するのではなく、ドゥテルテ路線の継続という一点で投票先を判断した。マルコスが歴史的な得票数を叩き出した要因は、この点にあると考えられる。

## 権威主義的民主主義

ここで重要なのは、有権者は権威主義というネガティブな側面がありつつも、それをカバーする社会民主主義というポジティブな側面があると考えてドゥテルテ政治を支持しているのではないということである。2019年6月のソーシャル・ウェザー・ステーションの世論調査によれば、82%のフィリピン人が麻薬戦争に「満足」と回答している (Flores 2019)。これは大量の犠牲者をだした政権初期の麻薬捜査が、国内外から猛烈な批判を受けた後の世論である。その背景には、麻薬戦争を契機とする治安状況の顕著な改善がある。ドゥテルテ政権発足後の3年間の犯罪認知件数は、それ以前の3年間に比べて62%減少した。首都圏では殺人件数が増えているものの、強盗が72%減、窃盗が64%減という著しい変化があった (日刊まにら新聞 2019)。社会を規律化し、秩序をもたらすという公約をドゥテルテは立派に果たしていると有権者は実感した。このような劇的な生活状況の改善は、過去の政権がまったく実現できなかったことである。つまり、フィリピン国民の多くはドゥテルテの権威主義的な政治手法も肯定的に評価しているのである<sup>3</sup>。

最後に、以上の議論をふまえて、フィリピンにおける民主主義の特徴について指摘しておこう。ドゥテルテ大統領の登場以来、多くのメディアや知識人は、フィリピンを世界的な「民主主義の後退」の一事例であると捉えてきた。しかし、これはフィリピン人の感覚とはかけ離れた理解である。ドゥテルテ政権期に、フィリピン人の民主主義に対する満足度はむしろ上昇しているのである (Kreuzer 2020 : 3)。麻薬戦争やインフラ開発といったドゥテルテ政権の主要政策を継続している現在のマルコス政権に関しても、2023年4月の世論調査で89%のフィリピン人が民主主義の状況に「満足」と回答した (Relativo 2023)。フィリピン人からすれば、ドゥテルテやマルコスは国民が必要とする政策を忠実に実行し、しかも成果をあげるのに十分な指導力を有している。民意がうまく国政レベルの政治的意思決

定に反映し、民主主義が有効に機能しているように感じられるのだ。先進国の人間は、民主主義を自由主義的民主主義と同一視する傾向がある。しかし、自由主義は民主主義と結びつくアプローチのひとつにすぎない。法的手続きを無視した麻薬戦争やメディアへの攻撃は、たしかに自由主義を後退させている。しかし、フィリピンでは自由主義とは異なるアプローチで有権者の求める政治が実現されている。それは、権威主義的民主主義と呼ぶものである。

1986年のピープル・パワー革命により、父マルコスの独裁政権が打倒され、自由主義的民主主義の制度が復活した。しかし、この民主化された体制は、地方に権力基盤をもつ伝統的なエリートを復権させることにつながり、汚職をなくすことも、経済発展を牽引することもできなかった。それは、ある意味で当然の結果だった。政治や経済が発展するための制度的な基礎は、自由民主主義そのものからは生まれてこない。先進国の歴史的経験が示すように、政治制度や産業の発展には、大衆の政治参加の拡大に先立つ政府の公的権威の確立という段階が必要だった。絶対主義の経験をもたず、植民地宗主国も実効的な官僚機構を育成しなかったフィリピンは、自由主義が解決してくれない近代的政治秩序の創出という課題に、試行錯誤して取り組んでいるように思われる。その課題の重要性がフィリピン人に広く共有されていることが、ドゥテルテやマルコスが強く支持される基礎なのである<sup>4</sup>。■

### 《注》

- 1 学歴別の投票傾向を細かく見れば、マルコスの支持率は大学卒層でもっとも高く、小学校卒業以下層でもっとも低かった (Dulay et al. 2023 : 93)。
- 2 パルス・エイジア社の世論調査によれば、2021年9月の時点でミンダナオ島におけるマルコスの支持率は9%だったが、サラ・ドゥテルテとの同盟が形成された同年12月には、64%に上昇した (Teehankee 2023 : 7)。
- 3 より詳細なドゥテルテ政権の評価については、原 (2023) を参照。
- 4 念のために付言しておくが、筆者は自由民主主義を不必要だとか、劣った制度だと考えているのではな

い。その逆に、自由民主主義は、人類社会が編み出したもっとも優れた政治制度であるとする。しかし、この自由民主主義がうまく機能するには、公的な権威をもった国家が社会から自立して存在するという条件が必要であり、その条件は自由民主主義自体から生まれるわけではないから、自由主義とは異なる政治的プロジェクトが重要になってくるのである。

《参考文献》

- 日刊まにら新聞 (2019) 「現政権下で犯罪6割減 首都圏殺人は3割増」『日刊まにら新聞』10月2日。https://www.manila-shimbun.com/category/society/news247312.html.
- 原民樹 (2023) 「2010年代のフィリピン政治をどう理解するか—社会民主主義への転換」原民樹・西尾善太・白石奈津子・日下涉編『現代フィリピンの地殻変動—新自由主義の深化・政治制度の近代化・親密性の歪み』花伝社、32-52頁。
- Dulay, Dean C. et al. (2023) 'Continuity, History, and Identity: Why Bongbong Marcos Won the 2022 Philippine Presidential Election,' *Pacific Affairs*, 96(1), 85-104.
- Flores, Helen (2019) '82% of Pinoys satisfied with drug war — SWS,' *The Philippine Star*, September 23. https://www.philstar.com/headlines/2019/09/23/1954156/82-pinoys-satisfied-drug-war-sws.
- Kreuzer, Peter (2020) *A Patron-Strongman Who Delivers: Explaining Enduring Public Support for President Duterte in the Philippine*, (PRIF Reports, 1), Frankfurt am Main: Hessische Stiftung Friedens- und Konfliktforschung. https://nbn-resolving.org/urn:nbn:de:0168-ssoar-69009-8.
- Ramos, Charmaine R. (2020) 'Change without Transformation: Social Policy Reforms in the Philippines under Duterte,' *Development & Change*, 51(2), 485-505.
- Relativo, James (2023) 'Almost 90% of Filipinos 'satisfied' with democracy in the country — SWS,' *Philstar.com*, April 22, https://www.philstar.com/headlines/2023/04/22/2260839/almost-90-filipinos-satisfied-democracy-country-sws.
- Social Weather Stations (2022) 'Second Quarter 2022 Social Weather Survey: Pres. Rodrigo Duterte's final net satisfaction rating at +81,' 2nd Quarter 2022 Social Weather Survey SWS MEDIA RELEASE 23 September 2022.
- Teehankee, Julio (2023) 'Beyond Nostalgia: The Marcos Political Comeback in the Philippines,' Southeast Asia Working Paper Series No.7, Saw Swee Hock Southeast Asia Centre.

